

## 数千人のユダヤ人の命を救った 樋口季一郎中将

川島 順 予科21-7  
(越谷市) 航空7-1

### はじめに

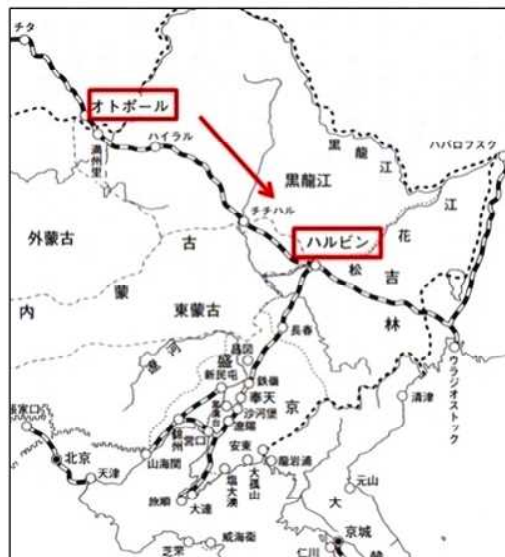
フェイスブックで 韓国のジャーナリスト趙甲済(チョガブジエ)のブログ(バンダービルド名で運営している)で、数千人のユダヤ人の命を救った日本軍人として樋口季一郎中将を紹介している記事を見つけた。ナチスに迫害されたユダヤ人の命を救った杉原千畝の話は人口に膾炙されているが、樋口中将の話は初耳であったので、ご存知の方もおられるかも知れないが、敢えてここに紹介する。

なお、当時の満州には、シベリア鉄道がソ連のオトポールから満洲の南満洲鉄道を介して、満洲里-ハルピンを経由してウラジオストクまで開通していた。

1938年(S13)は第二次世界大戦の始まる前年である。当時のドイツでは1933年(S8)にヒトラーのナチ党が権力を掌握し、1935年(S10)年にはユダヤ人を二流市民とする人種差別的なニュルンベルグ法が成立し、ユダヤ人の排斥、迫害が組織的に行われるようになった。その結果、ドイツを追われたユダヤ人の難民がシベリア鉄道を使って満州を経て上海に向かうため大挙押し寄せてきた。

そして、満州の入口のオトポール駅で満州国官吏によって入国を拒否され足止めされた。この事件はオトポール事件と呼ばれているが、この事件解決に樋口中将が一役買った訳である。

なお、リトアニア領事館員杉原千畝がユダヤ人にビザを発行した話は第二次世界大戦の始まった後の1940年(S15)ドイツが進入したポーランドから逃げてきたユダヤ人にビザを発行したものである。以下、ブログの記事をそのまま転載する。



《1938年3月8日、満州国特務機関長樋口季一郎中将にニュースが一つ飛びこんだ。ナチスドイツの迫害を避け、畜舎のような劣悪な状態の列車にぎっしりと身を寄せた状態で、命をかけてようやく極東地方に避難したユダヤ人が満州国から入国拒否を受けて、もう身動きができない境遇に陥ったというニュースだった。気温が氷点下30度まで下がった極限のオトポール駅(ソ連と満州国との間の駅)で足止めされ、ユダヤ人たちは劣悪な環境に放置されてしまった。



樋口季一郎  
中将

これが「オトポール事件」である。満州国外交部の入国拒否措置について、極東地域のユダヤ人協会会長だったカウフマン氏は、日本関東軍諜報機関の首長の特務機関長樋口季一郎中将に面会を要請した。

事実上日本の支配下にある満州国で、強大な権限を持つ日本関東軍の核心要職の樋口季一郎中将に、入国ビザを発給するよう満州国に命令してほしいと懇願するためだった。カウフマン氏の懇願に接した樋口中将は、すぐには返事をしなかった。当時、日本はドイツと同盟関係だったので、ドイツから逃れてきたユダヤ人たちを救済すると、ドイツから激しい抗議を受けるなど外交問題に飛び火する可能性があった。併せて、満州国に対し、ユダヤ人に入国ビザを発給するよう樋口中将が命令するのは、明らか行き過ぎに該当する。

樋口中将が悩んだもう一つの理由は、過去、樋口がロシアに赴任したとき、周囲の人々のほとんどが有色人種だという理由で差別されていたとき、ユダヤ人だけは樋口を差別しないで接してくれたという点を忘れることができなかったからである。

樋口中将はしばらく悩んでからカウフマン氏に対して言った。「カウフマン博士、ユダヤ人難民を要求されたとおりに受け入れましょう。これによるすべての責任は私

が負います。」カウフマン博士は、その時、その場で泣いてしまった。

樋口中将は、その後一気に必要な措置を取った。彼は満州国外交部に指示を出して、ユダヤ人難民に入国ビザを発行するよう措置した。そして満州鉄道社本社の松岡総裁に電話をかけて、ユダヤ人を追加輸送するための列車を緊急に手配するよう要請した。また、ユダヤ人に衣類や食品を提供し、患者には治療措置をしてあげた。当時、この樋口中将のビザ発給措置で命を救われたユダヤ人は数千人に達するといわれている。

樋口中将の措置を知ったドイツ当局は激怒した。日本政府に向かって激しく抗議して、樋口中将の即時処罰措置を要求した。これについて樋口中将は関東軍本部から出頭命令まで受けた。しかし関東軍の司令部は、人道的措置によるものだということを勘案して、特別な責任を問わなかった。

以来、本土に人事発令を受けた樋口は、北海道札幌に本部を置く北部地域の防衛司令官として赴任した。そして、その状態で終戦を迎えることになる。

ところが、終戦直後にソ連軍が北方領土を侵略してきた。ソ連軍は両国間の中立協定を一方的に破棄し、当時日本の領土だった南サハリンと北方の島々を侵略して占領していった。ソ連の意図は、すみやかに日本本土（北海道）に侵入するというものであった。

終戦後、日本政府の機能が麻痺した状態で、樋口司令官は独自の判断で、一戦不辭の覚悟で戦いに出る決断を下す。そして北方地域に散らばった日本軍を急いで再整備し、ソ連軍の大々的な攻勢に対抗して戦った。そして、最終的にソ連軍の侵攻部隊を壊滅させることになる。これにより、ソ連軍の日本本土上陸の願いは失敗に終わる。

激怒したソ連は、樋口司令官を戦犯と規

定して、日本を軍政統治していた米国に対して、樋口司令官の身柄を引き渡すよう要求した。マッカーサーはソ連の\*-/この要求を断固として拒否した。

以後開かれた東京裁判では、日本軍の核心要職にあった主要指揮官であったにもかかわらず、樋口は裁判にかけられなかった。

樋口自身が裁判にかけられなかった具体的な理由を知ったのは、1950年(S25)に日本を訪問したアインシュタイン博士を介してだった。

当時、来賓としてユダヤ人のパーティーに招待された樋口は、パーティーの幹事の役割を引き受けたミハエル・コーガンというユダヤ人から、今まで自身をめぐる行われた出来事を初めて知ることになる。

ソ連が樋口の身柄引渡しを強く要求したとき、きっぱりと拒絶した連合軍総司令部（マッカーサー）の背後には、米国国防総省があった。そして、このような米国の国防総省の後ろで影響力を行使していたのは、ニューヨークに本部を置いている世界ユダヤ人協会だった。

樋口季一郎が満州国の国境オトポールで身動きできなかつたユダヤ人たちを救済してくれたおかげで、この時命を救われたユダヤ人のうち何人かが、ニューヨークの世界ユダヤ人協会で働くようになっており、後にユダヤ人協会は、「今こそオトポールで受けた恩を返す時だ！」という内容で、世界各地に散らばっているユダヤ人たちを対象にして、「樋口救命運動」を繰り広げたのだ。

そして、このようなユダヤ系の努力が、最終的に米国国防総省を動かし、国防総省が連合軍総司令部（マッカーサー）を動かしたものである。樋口がソ連に身柄が引き渡されなかつたこと、東京裁判にかけられなかつたこと、すべてが凍土の地オトポールで樋口から恩恵を受けたことを決して忘

れなかつたユダヤ人たちが見せてくれた報恩だった。

以後、樋口季一郎（1888～1970）は、複数の機関と企業から顧問就任などの要請を受けたが、すべてを断って隠居して、82歳で生を終えた。》

### あとがき

樋口季一郎中將の関与したアッツ島玉砕、キスカ島撤退作戦について次のように補足したい。

樋口季一郎中將は、1942年(S17)8月1日、札幌に司令部を置く北部軍（のち北方軍・第5方面軍と改称）司令官として1943年(S18)アッツ島防衛・キスカ島撤退作戦及び、終戦後、ソ連が侵攻してきた占守島の防衛作戦を指揮した。

1943年(S18)当時、アッツ島には、守備隊約2千6百名が配置され飛行場や陣地の建設を行っていた。同年5月12日、戦艦、空母を含む約30隻の艦艇に掩護された米軍がアッツ島に上陸を開始した。日本軍守備隊は約1万1千名の米軍を相手に死闘を繰り返したが、5月29日、部隊長山崎保代大佐は生き残り兵3百名を率い米軍第7師団本部近くまで突入全員玉砕した。

一方、キスカ島には約6千名の守備隊が配置されていたが、完全に米軍の飛行機、艦艇により封鎖されていたので、6月より潜水艦による補給作戦を行った。しかし、米軍の電探による哨戒網が厳重で、潜水艦も次々撃沈されたのでキスカ島の守備を諦め、撤退することになった。

第1回の撤退作戦は7月15日巡洋艦阿武隈以下15隻の艦艇で行われたがキスカ島突入直前に霧が晴れ、米艦艇に発見される可能性が高くなったので、最高司令官木村昌福少將の判断で急遽中止となった。

第2回目は7月29日に決行された。撤退作戦は第1回と略同様の艦艇部隊で行われたが、木村少將の要請で就任間もない最

新鋭の電探を備えた駆逐艦島風が警戒部隊として特に配置された。また、守備隊の最高指揮官樋口中将は、救援艦隊の木村昌福少将の要請を容れ、大本営の決裁を仰がずに独断で守備隊に小銃を含めたあらゆる武器の海中投棄を指示して、乗船時間の短縮を計った。その結果、大発によるピストン輸送でわずか 55 分で巡洋艦 2 隻、駆逐艦 6 隻へ守備隊員 5 千 2 百名を分散収容して、キスカ島を撤収した。輸送用の大発は撤収後そのまま放置された。

8 月 15 日、アメリカ軍は艦艇百隻余を

動員、兵力約 3 千 4 百名をもってキスカ島に上陸した。最早、存在しない日本軍との戦闘に備えて極度に緊張した状態で進軍したため、各所で同士討ちが発生し、死者約百名、負傷者数十名を出した。上陸したアメリカ軍の見たものは、遺棄された数少ない軍需品と数匹の犬だけだったという。

このように卓越した洞察力、指導力を持った日本陸海両軍の指揮官の存在によって世界史に類例のない無血撤退を可能にした。